

国際金融マンから 神父へ転身

谷口 幸紀

聞き手：佐多 保彦 株式会社東機翼 代表取締役社長

佐多：今年4月にローマ法王（ヨハネ・パウロ二世）がイスラエルのガリラヤ湖畔で10万人の野外ミサを行われたと、読売新聞の記事（2000年4月21日付）が詳しく伝えています。それによると、このミサは「新求道共同体」（注参照。以下「共同体」と略）という運動のメンバーが設営し、大多数の参加者もこのメンバーであった様ですね。このミサの実現の中心にはキコ・アルゲリヨというスペイン人の一信徒がいて、ギターを抱え、自作の聖歌を歌い、しかも司教たちがたくさんおられるところで、説教をされたとのこと。このキコという人物は日本ではまだ全く知られていませんが、谷口さんを留学へとローマに送り出してくれたのは、この「共同体」と伺っていますが……。

谷口：キコは、聖職者ではなくただの一信徒ですが、エネルギーにあふれ、スピリッツとカリスマ性も兼ね備え、自作の聖歌を歌いながら、この共同体の推進役となっています。それは、1970年代に新左翼運動が盛んだった頃に、形骸化した信仰を問い直すとする若者たちから始まった運動です。教会が形だけのものとなり、実際の救済の場になっていないとの問題意識から、ローマに「共同体」の神学校をつくりました。今では、この共同体には100カ国以上で100万人を超す参加者があります。キコの人柄には8年間、ローマにいた間に身近に接してきましたが、私と同年の60才です。彼こそ、800年前のアシジの聖フランシスコ以来久々の新しい大型聖人になる可能性を秘めていると、私は考えています。キコについて書かれた日本語の本はまだありませんので、いつか紹介の本をと、希望しています。

佐多：日本では、カトリックの神父やシスターをめざす人々が、ここ20年位極端に少なくなってきたと聞いています。豊かな世の中になったので仕様がなくなるとは大勢の意見の様ですが、果してそう簡単に言えるのでしょうか？

豊かになって、かえってお金や仕事そしてレジャーにと追いつめられる生活にむなしさを覚え、もっとスピリチュアルな生き方に興味を持つ人たちは、老若男女を問わず、逆に増えてくる様な気もするのですが。現在、我国の青少年といわず、あらゆる層にみ



える「イジメ」や常識では解らない惨劇を理解し、改善するカギは、ここにあるのではないのでしょうか。90年代初期に『清貧の思想』という本が我国で爆発的に売れたことの底流に流れる日本人の持つ精神性の清流に気づき、そしてこの流れに乗るという生き方がもっと出て来る様に思うのです。

谷口：今のカトリック教会は、後継者が不足しています。今ある路線は魅力に乏しく、神父になろうという人が入ってこなくなったのです。ひとびとが、見切りを付けているのです。現在のままを、そのまま引き継ぐのではダメだと思います。例えば、ミッション・スクールでさえ、信仰教育を自信を持ってやっていない。受験の進学校やお嬢さん学校になってしまっています。私の母校もミッション・スクールでしたが、校長が「ここは人格教育を行う所である。東大に入れりたければ、近くの灘高に行ってください」と言い切っていました。この世の出世志向やエリート志向の価値観と、信仰の価値観は、異なっているので、相容れないのです。

佐多：個人として、経済的な安定、あるいは、あるレベル以上の社会的ステータスをめざすと共に、同時に、精神的に高いものを求め、信仰にも篤い人になることは、それほど難しいことでしょうか？ 聖書の『シラ書』の「富について」の所には「富がもて身を滅ぼす危険は大いにあるが、富の誘惑に打ち勝ち、会衆に施しをしながら、清廉潔白に生きる金持ちは幸いである」とありますが。

谷口：富や栄誉と、信仰の両方をめざすことは、矛盾はしてはいませんが、普通の人は、どちらかに片寄ってしまうものです。神の国を二の次にして、この世の価値を求めてきた人は、なかなか神様に出会えない。しかし、信仰の種を失わなかった人は、一時世俗の世界にまみれても、又神の国へ戻れるのです。キコの場合は、普通の人ですが、俗世界のものすべてをすてて、神様につかえています。

佐多：日本の医学は、延命にかけては抜群の成績をあげ、日本人の寿命は、この50年で飛躍的に延びて、昔45歳だったものが今や

谷口 幸紀 / たにくち・こうき

1939年、大阪で生れる。熱心なプロテスタントの母親の影響で中学生2年の時、洗礼を受ける。キリスト教系の六甲学院中学・高校に通う。上智大学文学部哲学科に入学。同大学院に進み、中世哲学研究室の助手になる。69年、38歳の時、学園紛争が原因で、国際金融バンカーの道を歩み出すこととなる。いくつかの外資系銀行にスカウトされ、ドイツ、イギリス、アメリカで、外債発行の業務に奔走。しかし、世話をしていた妹の病氣回復を機に、85年、46歳にして、高収入のエリート・ビジネスマンを止めて、すべてを捨て、神だけの道へ入る。半年間、東京・山谷で日雇い暮らし。89年、49歳で本場バチカンのあるローマの神学校へ留学。司祭となって、8年後に帰国。98年より、四国高校の神学校の担当として、新校舎建設のための準備活動で忙しい。異色の経歴の神父として、新聞、雑誌に、たびたび報道、紹介されている。

(注) 新求道共同体 (Neocatechumenal Community、ネオカテクメナル・コミュニティ)とは、スペイン人キコがマドリッドで始めた草の根的運動で、名称は古代ローマの迫害時代に存在した「求道共同体」から採られたもの。カトリックに従順で、その枠内で、原始キリスト教に回帰しようとする動きと言える。

80歳に達しています。しかし、その延命した分、日本人の精神性は、果してどうなったのでしょうか？

谷口：とても難しい問題ですね。例えば宗教的に考えて、キリスト教に救いを求めるというか、精神性の根源を希求しても、古いキリスト教は、今日、空洞化しています。そのため、こころの渇きを癒す場を求める現代の人たちのこころを、理解できない。だから、人々は古い教会の中にはその場が無いと感じて、新しい場所を求めているようです。

「共同体」は、ガリラヤ湖畔の「山上の垂訓の丘」上に、新たに研究・会議・宿泊の大きな施設を建てましたが、これはキコの努力が実を結んで、イスラエル政府も、実に驚くべきことなのですが、キリスト教にとって意義深い場所に例外的に建設を認めたものです。今年4月、ローマ法王は、この地を訪れ、10万人野外ミサに先立って、この施設の落成祝別式を執り行われました。

佐多：日本には、日本の風土にあったキリスト教を、という、いわゆるインカルチュレーション(キリスト教の文化内開化)の問題については、どうでしょうか？遠藤周作氏は、『沈黙』の本当の主人公が、ロドリゴ神父ではなく、キチジローであると言われ、はた又、キチジローはクリスチャンか否かの目目でふらふらと行ったり来たりしている頼りない人間として描いておられます。それが実は、あたかも遠藤氏自身あるいは日本人としてのクリスチャンのあり方のモデルでもあるようですね。

谷口：日本は、キリシタン時代に一度はファースト・ラブの情熱でキリスト教を受け入れました。しかし、迫害と鎖国の歴史を通過した後の日本人の心には、離れた相手に対するような屈折したものがあって難しいですね。ヨーロッパの場合も、身近に、教会など伝統的なキリスト教の建物が数多く残っているのに、歴史の手垢に汚れて形骸化した教えでは、人々の心は癒されていないようです。

佐多：谷口さんが経験された国際金融の世界はまさにグローバル・



スタンダードで動いている世界ですから、お分かりと思いますが、日本人は、いわゆる経済・社会面でいやおうなく「普遍性」を理解する必要に迫られたしました。カトリックという言葉は「普遍」という意味だそうですが、どう解釈したらよろしいでしょうか？

谷口：21世紀は、宗教間の「対話と相互理解」がますます進むと思います。今までは宗教がからむと、戦争がドク沼化したりしましたが、これからは、盲目的なドグマにとらわれることから離れて、科学的に、学問的に宗教を扱うようになるでしょう。今年の夏、野尻湖での経験で感激したのは、プロテスタントの3教派の牧師さんが、英語で一緒に信仰告白をしましたが、カトリックと全く同じ「語句」を用いていました。一致するベースが、既に、ちゃんと在るのです。

佐多：今後、谷口さんのように、中年を過ぎた人々で、神学校に入ってくるひとたちが増えてくる可能性は、如何でしょうか？谷口さんは、46歳の時銀行をやめられ、49歳でローマへ行って、神父になれましたが、遅くはなかったですか。

谷口：神学校に入った時は最年長でしたが、神父になった時には、さらに私より年寄りも入ってきました。決して、遅いということはない、と思います。世界的にも、社会人としての経験を十分にふんで、40代を越えて神学校に入ってくる人は、多いのです。また、受け入れる神学校の体制も、できつつあります。今は世界的に司祭が足りないのです。興味のある方は、是非私にご連絡を下さい！

佐多：最後に、日本のキリスト教は、50年後、100年後には、どうなっていると思われますか。

谷口：そうですね、形からすると、教会のオルガンから、キコのギターにとり変わるようなことは、大いにありえますね。あるいは内面的には(既にその動きは活発になってきているのですが)何らかの形で、神の修行など東洋の瞑想のあり方が、カトリックの中にどう取り込まれていくのか、興味津々のところでもあります。

第3回 世界小児集中治療医学会 (モントリオール)に参加して(1)

国立小児病院 麻酔集中治療科
小児医療研究センター 病態生理研究室

中川 聡

恩師Dr. Barker主宰のモントリオールでの学会に出席

本年の6月にカナダで開催された3rd World Congress on Pediatric Intensive Care(第3回世界小児集中治療医学会)と、第7回小児集中治療ワークショップに参加する機会を得た。前者は、6月25日から29日までモントリオールで、後者は、前者のポストコンGRESS・ミーティングとして6月30日にトロントで開催された。

私は、1991年に、佐多フェローとしてトロント小児病院(the Hospital for Sick Children)で、小児集中治療と小児麻酔の短期研修の機会を得た。その後、1993年には、同病院の小児集中治療部の臨床フェロー(専門研修医)として、再びカナダの地を踏んだ。トロントで2年間の研修を行い、その後、米国での研修を経て、1996年に帰国した。帰国してからも、カナダへはたびたび訪問している。早いもので、私が最初にカナダを訪問してから、10年近くが経過しようとしている。

今回のモントリオールでの「第3回世界小児集中治療医学会」は、トロント小児病院の小児集中治療部部長のDr. Geoffrey Barkerが会長として主宰したものである。私の小児集中治療医学の基礎は、私のトロントでの研修時代にDr. Barkerの指導によって築かれたといっても過言ではない。恩師であるDr. Barkerが主宰する今回のモントリオールでの学会は、私にとっては万難を排してでも出席したい学会であった。

若い「世界小児集中治療医学会」

世界小児集中治療医学会は、今回で3回目という若い国際学会である。第1回は1992年に米国のボルチモアで、第2回は1996年にオランダのロッテルダムで開催された。実は、第1回のボルチモアでの学会にも私は参加しており、その時は小児でのpressure support ventilationについての研究成果をポスターで発表した。第2回の学会がロッテルダムで開催された1996年5月には、私は米国での研修の最中で、残念ながら、この第2回の学会には参加できなかった。

今回のモントリオールでの学会は、世界50か国以上から2700人も参加者があったとのこと。第2回のロッテルダムでの学会の様子は、



中川 聡 / なかがわ・さとし

1984年 東北大学医学部卒業

同年～1987年 沖縄県立中部病院臨床研修医

1987～1988年 沖縄県立宮古病院小児科医員

1988～1992年 国立小児病院麻酔科研修医、医員

この間1991年1～3月 佐多フェローとして、

カナダ国トロント小児病院へ留学

1993～1994年 カナダ国トロント小児病院

小児集中治療部臨床フェロー

1995～1996年 米国マサチューセッツ総合病院および

ニューイングランド医療センター

小児集中治療医学臨床フェロー

1996年 国立小児病院麻酔集中治療科医員

(小児医療研究センター病態生理研究室研究員を兼任)

現在に至る

私は知らないが、8年前の第1回と比べると明らかに規模が大きくなっており、小児集中治療という専門分野が世界中で着実に浸透しつつあることを示していると感じた。

今回の学会で扱ったテーマは、急性呼吸不全や人工呼吸管理から、臓器移植、生命倫理、外傷といった幅広い領域をカバーしていた。プログラムは、4日間という限られた日程の中で、参加者がいくつかのテーマに照準をあわせながら、新しい知識を吸収したり、世界のエキスパートと意見を交換したりできるよう、構成されていた。今回のモントリオールの学会は、総括的でありながらアットホームな雰囲気もあり、私がこれまでに経験した国際学会の中では、もっともリラックスしながら参加できた学会であった。

学会出席の意味

今回の学会に出席することは、私にとっては、いくつかの意味があった。まず、学会の主宰者であり私の恩師であるDr. Barkerに感謝の意を表すこと、次に英語での講演を行うこと(多くの聴衆の前での英語での講演は、今回がはじめてであった)、最後に、昔、一緒にトロント小児病院で研修をした仲間と会うことである。トロント小児病院の小児集中治療部の臨床フェローの大多数は、地元カナダの出身ではなく、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、米国などの世界各国からトレーニングのためにトロント小児病院の門を叩いた者である。

学会3日目の夜に、学会場の近くのホテルでトロント小児病院の歴代のフェローを集めてのパーティーがあった。文字通り、世界中から歴代のフェローが集まった。イギリス、アイルランド、スイス、



アイスランド、オーストラリア、香港、インド、イスラエルなどといった参加者の出身国を見ると、Dr. Barkerが蒞いた種が全世界に広がっていることが、一目瞭然であった。日本からは、宮坂勝之先生(国立小児病院)、田村正徳先生(長野県立こども病院)、阪井裕一先生(国立小児病院)、渋谷和彦先生(東大)、桜井淑男先生(慈恵医大)といった歴代の臨床フェローに加え、鈴木玄一先生(順天堂大)と秦恒彦先生(福岡市立こども病院)が、佐多フェローを代表して出席された。私は、家内と一緒にこのパーティーに出席し、Dr. Barkerに、これまでの感謝の意を伝えた。

盛況の講演会で発表

今回の学会では、シンポジウムやワークショップなどで、宮坂、田村、阪井の先生方に加え、私も発表を行う機会を得た。そのなかで、私にとって最も大役だったのは、NMI社が主催したランチョンセミナーでの講演であった。このランチョンセミナーは、学会3日目の6月27日火曜日に開催され、“Are Complex Ventilation Modes Always Essential?”というテーマのもとに、三部に構成された講演会であった。今回の世界学会の会長であるDr. Barkerが司会をされ、まず、宮坂先生が“All You Need Is a Patent Airway”と題する講演を行い、私が二番手として“All You Need Is Pressure Controlled Ventilation”という題で話をし、そして最後にトロント小児病院のDr. Peter Coxが“All You Need Is Volume Recruitment”という講演で締めくくった。

すなわち、この3つの講演を通して、気道管理から人工呼吸のモード、さらに有効な肺容量確保の方法について、概観できるという構成になっていた。この講演会は、当初、100人程度を集められれば成功と考えられていたが、最終的には、400人近くの聴衆を集め、昼食も追加注文をしなければいけないという事態になり、主催者にとってはうれしい悲鳴だったに違いない。

英語での講演に緊張

私にとって、英語での講演は今回が2回目であった。1回目は

1997年の香港でのアジア小児科学会で、その時は、肺損傷予防について話をした。その時の聴衆は100人程度だったと記憶しているが、今回はそれを越える多くの人々が集まったので、それだけでなく、慣れない英語で講演するために緊張していたのが、輪をかけて私の緊張は高まった。

しかし私の緊張ぶりを察してか、司会のDr. Barkerや、私の前に講演された宮坂先生が、話をしやすい雰囲気を作ってくださり、実際、講演をはじめるときになると少し落ち着いて話ができるようになった。肝心の講演のほうは、うまくいったのかどうかは、自分ではわからなかったが、講演の後にDr. Barkerから“You speak well.”といわれて、お世辞がかなり入ったねぎらいの言葉だろうとは理解しつつも、とりあえずは及第点の講演ができたのだろうと自分で考えるようになった。

国際学会の成果とたのしみ

今回のような国際学会では、経済状況のすぐれない国からの参加者も多く、そのような国での集中治療、人工呼吸管理を考えると、かならずしも高価で多機能を搭載した人工呼吸器が必要なのではないことは明白である。それを前提に考えると、人工呼吸管理に必要なのは、最新鋭の機械ではなく、必要な機能を搭載している信頼できる人工呼吸器と、その使い方を知っている人間であることは、先進国や開発途上国を問わず共通の真理である。そのことを、今回の講演会を通じて、ひとりでも多くの人たちに理解していただけたことが、この企画の発案者のひとりとしての希望である。

今回の学会では多くの恩師や旧友たちに会うことができた。トロント小児病院の医師だけではなく、小児集中治療部の看護婦さんたち、それから、一緒に研修をしたかつてのフェローたちとは学会場でも、また学会が終わった後の夕食会でもいろいろと話をすることができた。また、シンポジウムやワークショップなどでの発表を通じて、新たに知り合いになった人たちもいる。これが国際学会の楽しいところである。今回は、3年後にアルゼンチンのブエノスアイレスで開催されるとのことである。

(続く)

旧ソ連孤児の 大学生を10年間近く 支援を続ける活動

旧ソ連学生奨学援助日本基金 代表委員 事務局長

横須賀 壽子さんに聞く



横須賀さんは、1925年東京にお生まれになり、戦後、平和運動に関わり、特に善隣友好を通して平和に貢献したいとの思いから、1966年より日ソ友好団体に参加、71年から89年の間、日ソ親善協会(会長 赤城宗徳)に勤務。自民党の赤城議員の下でお仕事に専念。89年にご主人を亡くされ、また旧ソ連が崩壊したことから、一念発起して、個人の立場から、ロシアの孤児たちに学資を送るボランティアを始めたという。現在、長崎の被爆マリア像を展示するペラルーシでの被爆展の準備にお忙しい所、横須賀さんにお話をうかがった。(文責:編集部)

1992年、「旧ソ連学生奨学援助日本基金」の設立に中心的役割を果たした横須賀さんは、その後、事務局長として多忙な実務をこなしてきた、と明るく笑う。基金を始めた頃は「5年もすればロシアの経済も回復するだろう」との予想だったが、今なお援助を求める大学生が減っていないそうである。日ソ親善協会の頃から30年間に2,3回はロシアを訪問してきたというロシア通。

ソ連の体制が崩壊した時には、大きく社会体制が変わり、すさまじいインフレの中での市民生活を知り、横須賀さんは、日本の敗戦後の苦しかった生活を思い出した。旧ソ連時代には、誰でも無料で教育を受けられたのに、現在では、国からの奨学金もわずかで、非常に厳しい学生生活だとのこと。横須賀さんは、協会の頃からの人脈を通して、ロシアの友人たちに呼びかけて、ロシアの若い人たち、特に両親のいない大学生を支援する運動を始めた。以来10年が経とうとしている。今は苦しくても、明日のために生きようとしている若者の学資を支援し続けてきた。これまでに基金から支援を受けた学生の数は300人近くに及ぶ。

ロシアに行った時には、必ず奨学生たちに会ってくるのが楽しみ、と、ひとりひとりの奨学生の経歴を語る横須賀さんは、学校の先生が教え子を語る時のように、実にうれしそうだ。奨学生は孤児なので、横須賀さんのことをママと呼ぶ子もいるそうだ。またロシアで、信頼できる多くの良い友人たちとめぐり合えたことが幸せだ、またこの友人たちとの信頼があればこそ、今日まで援助活動を続けてこられた、と語った。

ロシアの人々の生活は、ソ連体制崩壊の直前に起こった地震や、チェルノブイリ原発の事故もあって、今もなお、回復していない。横須賀さんは、戦後、我が国で小児麻痺が流行した時、ソ連から日本の子どもたちに小児麻痺ワクチンが贈り届けられ、子どもたちを救ってくれたことを忘れられない。横須賀さんが支援を始めた頃は、文房具や衣料品や薬を贈ったが、知人、友人の手荷物として運ぶのには、限界があった。

そして、物よりも、教育を支援することのほうが大切であると、考え方を切り替えてからは、学資を送ることを始めた。しかしロシアでは、銀行や郵便局がまだまだ整備されておらず、学資を送るのも、これまた大変。4ヶ月毎に奨学金を運ぶ苦労も、相当なものだとのこと。横須賀さん自身が、ロシアへ行く時に持参して、ロシア側の世話人に手渡すことも多いそうである。

若手オペラ歌手のヒブラ・ゲルズマワ(Hibla GERZMAVA)さん(今年30才)は、この基金の奨学金を受け、卒業した学生のひとり。1994年、大学院の時に、第10回チャイコフスキー国際コンクールで、みごとグランプリ優勝。このコンクールは4年に一度モスクワで開かれ、若手音楽家の登竜門として世界的権威を誇り、該当者なし、のことも多い超難関のコンクールとして国際的に有名である。

ヒブラさんは、1996年には「ジャパン・アーツ」が主催した「ソプラノ・リサイタル」のために、来日した。その時、「両親のいない私にとって、横須賀さんは母です。この奨学金は私のこころの扉を開いてくれました。日本の家族のみなさんのことを、一生忘れません」と、横須賀さんの努力と日本からの援助に対して、心からの感謝の言葉を述べた。

横須賀さん個人が中心となっている基金の活動を、側面から、いろいろな形で支えてくれる友人たちが、日本にも、ロシアにもいる。個人の善意と信頼とに支えられながら、成り立ってきた活動。通訳や翻訳などは、ボランティアの協力者が助けている。また、年2回から3回発行される基金の機関紙「地球人」(註)のために、横須賀さんの編集作業を、ボランティアが協力して助けている。

「地球人」には、ロシア各地の大学生たちから、感謝と勉強への決意の手紙が、たくさん寄せられている。また、毎年の新しい奨学生たちの顔写真も「地球人」紙上で紹介されている。



基金の奨学金を受けているロシアの大学生たちと

将来、これらの若者たちの中から、日露の友好関係の架け橋となるひとが、必ず出てくるものと信じている、と横須賀さんは樂觀的で、にこやかに語るその表情は、若々しく、印象深かった。ただ、モスクワの事務局で『日本人より心をこめて(仮称)』の題で出版物が企画され、ロシアの奨学生の手紙を基に、学生の奨学金支援についての活動を記載した本が出版される予定だったのが、経済的な理由で中止になってしまった、と話す時には、いかにも残念そうであった。

彼女は、学生援助基金の活動の他にも、反核運動にも、情熱を注いでいる。特に99年秋には、長崎の被爆者や平和運動に取り組んできた人たちの願いを受けて、サンクトペテルブルグ市の「国立歴史博物館」の館長に交渉し、長崎の被爆の実相を伝える常設展示室をつくる許可をとった。今、長崎の実行委員会は、その実現に取り組んでいる。

また「長崎県被爆者手帳友の会」の会員の手で出版された画集『空白の20時間』をベラルーシの反核運動を推進している友人に送ったことから、原爆展を開催したいとの相談があった。そこで、朝日新聞の被爆マリアの記事(98年12月付)のコピーを、友人に送って、カトリック教会を動かし、ミンスクのカトリック教会からの要請を、長崎の大司教に伝えた。

こうした横須賀さんの努力が、ついに実を結んで、今年9月には、ベラルーシにおいて「20世紀の核の悲劇」展(広島・長崎・チェルノブイリ)が開催される運びとなった。

同時に開催された「世界のヒバクシャに捧げるミサ」においては、長崎の浦上天主堂の三村神父が、「被爆マリア像(木製)」を、自ら手に持って出席し、また「長崎の鐘」の贈呈式も行われた。

「20世紀の核の悲劇」展は、9月23日(土)、そして「世界のヒバクシャに捧げるミサ」は、翌9月24日(日)に、聖シモン・聖エレーナ・ローマカトリック教会で行われたが、日本からも1週間のツアーが企画され、これらの行事に参加した。



ロシア側の世話人と



(*注)

機関紙「地球人」は、会員に配布される。

会費は、個人会員 年1口1万円、法人会員 年1口10万円。

任意の寄付金も歓迎されている。

連絡先：旧ソ連学生奨学援助日本基金(事務局)

〒204 - 0012

東京都清瀬市中清戸1 - 607

TEL 0424 - 92 - 0521

FAX 0424 - 95 - 3331

ご寄付の口座名：

<郵便振替口座>

旧ソ連奨学日本基金 00120 - 1 - 606624

<銀行口座>

旧ソ連奨学日本基金 富士銀行 清瀬支店 普通1927471

スイス便り

Zwischenjahrの過ごし方：アルバイト体験記

米川 恵子



米川 恵子 / よねかわ・けいこ

1979年京都生まれ。

1993年よりスイス、Zurich (チューリヒ)郊外のZumikon (ツミコン)市に在住。

2000年 Zurich州立Stadelhofen (シュタデルホーフェン) 高校ラテン語科を卒業。

3月の高校卒業後、続いて4月から大学が始まるのが日本のシステムですが、スイスでは、ギムナジウムを卒業した生徒が、次の何らかの教育を受け始めるまでに、かなりの間があるのが普通です。この自由な中休みの期間はZwischenjahr(中間の年)と呼ばれ、その長さは人によって異なります。1月に卒業して、10月から始まる大学に入学する人もいれば、1~2年働いたり旅行をしたりして、大学生生活のスタートを遅らせる人もいます。また、大学入学資格を持っていたり、必ずしも全員が大学進学を希望するわけではなく、例えばホテルマネジメント学校などに進む人もいます。その場合も中休みをして学校以外の経験を積みます。その過ごし方は様々ですが、ひとつ言えることはこの期間は在学中に経験できなかったこと、かねてからしてみたいかかったことを実行に移すための絶好のチャンスであり、それだけに私達の卒業後の大きな楽しみでした。

中でも、イギリスやアメリカでの語学研修は人気があり、私も2ヶ月半ほどイギリスの語学学校に通いました。その後、今度は全く違った体験を求めて、数ヶ月働いてみることにしました。大学のアルバイト仲介所で見つけたのは、チューリヒ空港内のデリカテッセン店の店員です。募集条件はドイツ語の他に、英語、フランス語、できれば他の外国語も話せる人、でした。初めて書いた履歴書を持参して面接を受けに行き、私の2ヶ月半だけ働きたいというわがままな希望も運良く受け入れてもらって採用が決まりました。アルバイトでも労災保険などを含むきちんとした労働契約を交わしサインをします。店の営業時間は、空港内にあるだけに、朝6時半から夜9時までと長く、年中無休です。空港内に3店舗あり勤務場所や出勤時間は日によって違うのですが、早朝からの勤務の時は、私の場合自宅から遠いので、寝過ぎさないよう用心して目覚し時計を2つセットし、午前4時に起きなければ間に合いません。

次の日から私にとって全く未知の世界が始まりました。指示された通りの服装で初出勤したまでは良かったのですが、売り場主任に足元をチェックされ「食料品を扱う店だから、サンダルでも、ストッキングを履いてくるように」と注意され、学校では習わなかった「常識」をまず教えられました。最初の2週間は日替わりで色々な先輩店員の側について、毎日たくさんの新しいことを教わりました。

先輩達がペルー人、フィンランド人、イラン人、ガーナ人、インド人、ユーゴスラビア人と大変国際色豊かなメンバーであることも非常に面白くてラッキーです。売っている品物を覚えたり、棚への補充品を倉庫に取りに行行って記録することなどを習いましたが、その他の難しいことはというと、支払いの時受け取る通貨が変化に富むことです。スイスフランの他に16ヶ国のお金を受け付けていますので、その換算の仕方、トラベラーズチェック、各クレジットカードの取り扱いの要領や1日の売上高の勘定の仕方を覚えるのに最初のうちは一生懸命でした。かなり慣れてきた今では、ちょっとした算数の問題を出された気分でごなせるようになってきましたが、最初の頃は先輩の計算の速さ、要領の良さに目を丸くするばかりでした。先輩それぞれが独自で開発した自分なりの速くて能率の良い計算の仕方を伝授して下さいなのが、今、大変役に立っています。1日の終了後、レジの決算などという大変責任を伴う仕事も、私のようなアルバイトの身でも任せられます。

勤務し始めてまだわずかですが、今ではすでに、レジが1つしかない店を1人で任されるので、接客をしつつ商品の包装もレジも迅速にしないと、時にはあっという間に行列ができてしまい、他のお客様を待たせてしまうことになります。でも、余り急いで機械を誤って操作したり、お金を数え間違えると、当然のことながら後で勘定が合わなくなりますので、集中して働かなければなりません。

こんな時に1番悪戦苦闘するのは出国直前のお客様が(特に日本人が多いのですが)両手にいっぱい的小銭をレジの前にジャラジャラと広げて「全部使ってしまうたいんやけど、これいくらある?」と(時には関西弁で)聞かれる事です。もちろんスイスの小銭は見慣れてはいるものの、レジの前の人々が前に習えとばかり、余った小銭をあるだけ財布の底から取り出ししているのに気がつく、思わず頭を抱えてしまいます。



キャビアをクラッカーに塗るための
黒檀でできた美しいtartineur

ところで、日本のお客様には私が学生アルバイトと知って「勉強頑張ってるね」と暖かい激励の言葉を頂く事もあります。また先輩店員達の間でも、日本人はとても礼儀正しく親しみやすい上、混んでいても辛抱強く待ってくれる、と評判が良く、嬉しい気持ちになりました。さてこのように小銭をかき集めての買い物客もいれば、一方で1度に何十万円もの買い物をする人もいます。帰国後パーティーでも催されるのか、高価なキャビアの大缶を9つ(なんと約70万円相当!)も買われた、身なりもゴージャスで美しいアメリカの婦人もいますし、1本数万円のワインを、1度に7本お買い上げのロシア人男性もいました。高価なワインを手にして包装する時、その値段に恐れおののきながら、ここで今、ボトルを落として割ってはいけない、と大変緊張します。

またある時、雰囲気マフィアのボス風で、しかもその抜群のおしゃれ度とカッコよさで人目を引くイタリア人男性の2人連れがキャビアの試食を希望されました。が、ベテラン店員の大柄のガーナ人女性は少しも動することなく「じゃあ主任に聞いておくから明日来て」と応答。彼らが出発客で明日は来られるはずがないことを知りながらの堂々の返事です。日本語で俗に「おととい、おいで」というのと同じだな、と、横で聞いていて舌を巻きました。その上、結局は、試食なしで、上等のキャビアを買っていただけたのですから.....。

次に店の品揃えについて少し書きたいと思います。1番重点を置いている売り物はキャビアです。「豚に真珠」、「猫に小判」と同じ意味でドイツ語に「庶民にキャビア」という表現があるのですが、まさにこの私にもぴったりで、これまで全然ご縁のないものでした。

そこで色々調べてみた所、同じチョウザメの卵といってもチョウザメの種類によってキャビアの名前、卵の色、サイズ、味、値段がそれぞれ異なることを知りました。そのうち年間100匹捕れるか捕れないかの大変まれなペルーガという種類は体長4m体重1トンにもなり100年も生きるものがあるそうです。ペルーガのキャビアの粒は大変大きく味も値段も最高級です。

店にはキャビアと同様、フォアグラもたくさん種類を揃えています。香り高いトリフきのこ入りの物は、グルメの間で人気があります。フォアグラについての知識も乏しかったのですが、これも調



チューリヒ市内の住宅地の中にあるブドウ畑。遠くにチューリヒ湖を望んでいる。

べてみると、フォアグラにはガチョウだけでなくカモのフォアグラもある事を知りました。ご存知のようにフォアグラというのは肥大させた肝臓という意味で、それを作るための家禽を強制的に肥育するテクニクは、なんと紀元前2500年のエジプトですで行われていた事がわかっているそうです。

それから、これらの高級珍味に合わせた、面白い小物もあります。例えば、キャビアをクラッカーに塗る時に使うtartineur(バターナイフのような物)はフランスの有名な洋食器会社の製品で、材料は黒檀、柄には銀細工が施してあり、デザインも非常に美しいものです。キャビア専用の、貝の真珠層で作られたスプーンもあります。先輩の話では、これらの小物がこのような自然から取れる素材で作られている理由は、キャビアの独特の香りを保つためだそうです。金属のスプーンで触れると、香りが台無しになるということでした。トリフ用のスライサーの台の部分には、同じ理由から、オリーブの木が用いられています。

ところで、皆様はスイスもワインを生産していることをご存知でしたか? 私の働いている店には、30種類を超えるスイスワインを取り揃えてあります。フランス語圏で造られているワインが主ですが、中には何と、チューリヒ市内のぶどう畑から造られたワインもあります。私はこれまでチューリヒといえば銀行が多く、スイス最大の都会だと思っていましたが、先日市内に住む友人の家を訪れ、近くを散歩していた時に、湖の見える景色がすばらしく、日当たりの良い丘の斜面にあるブドウ畑に行き当たりました。立て札を読んで、まさしくここで、私が店で売っている赤ワインのpinot noirという種類のぶどうが栽培されていることを知り大変驚きました。この畑には5050本のぶどうの木が整然と林立しています。都会だと思っていたチューリヒですが、ふと視線を上げると、太陽の光を燦燦と受けてワインのぶどうが育っていたことは大変新鮮で嬉しい発見でした。周りは市内の飛び切りの一等地で高級住宅地なのに、このぶどう畑がブルドーザーで破壊され近代的マンションに生まれ変わることもなく保たれているのは、すばらしいことだと思います。参考までに、スイスの白ワインはできるだけ若いうち(1~2年中)に、また赤ワインも4~5年までに飲むほうが良いそうです。

出会い (15)

修道生活きのうきょう

メア・クルバ

(わたしのあやまち - Mea Cu1pa)

奥村 一郎



1. 伝統と創造

どの社会であっても、「伝統と創造」とは不可分であるという、文化史上の大原則は変わらない。カトリックの修道生活においても、このことは同様である。一般にあまり知られていない領域かと思うが、カトリック教会自体にとっては、創立二千年来の、最も大きな変革であった出来事は、「第二バチカン公会議(1962 - 65)」である。

全世界の司教がローマ法王を中心として集まる会議を「公会議」というが、今回の会議は教会の全面的な抜本的刷新を実現したもので、まさに二千年の歴史のなかで、前古未曾有の出来事であった。過去の伝統に基づいて未来を創造するということは、全くの新しい誕生とさえいえる。その誕生に至るまでには、しばしば保革激突の危険を免れることはできない。

思い出せば、十年ほど前のこと。西欧カトリック修道会の、主な代表として、二十人あまりの修道者が日本の禅道場で一か月の修行体験をしたことがある。その間に道元禅師の創立になる福井の名刹、永平寺に宿泊、前晩から早朝の勤行と座禅に一同参加させてもらった。そのあとの話し合いで、オランダのトラピスト大修道院長の発言が今も耳新しく響いてくる。「私たちカトリックは、今までの古いものを捨てすぎた。それに対し、あなたたち禅寺では、あまりにも古いものに執着しすぎる」。

当時、カトリックにおいて廃止された伝承のなかで、大きなもののひとつとして「言葉」がある。すなわちラテン語である。公会議以前では、聖書も典礼も、神学の授業も、試験も、書くこと、話すこと、それどころかレクリエーションでのスポーツ用語に至るまでラテン語が強制された。強力な洗脳手段! ともかくそれまで一千年余、教会公式用語であったラテン語は今では半永久的死語になってしまった。

それに伴う功罪の一例として「メア・クルバ(MEA CULPA)」という、れっきとした古典神学用語がある。前号でとりあげた「トンスーラ」より内容の重い言葉で、「わたしのあやまち」という意味。この言葉は、かつてのミサ聖祭の冒頭において「メア・クルバ、メア・クルバ、メア・マクシマ・クルバ(Mea Cu1pa, Mea Cu1pa, Mea maxima Cu1pa)」と唱えながら、三度胸を打つ習慣があったこと

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』『サンパウロ』、『聖書深読法の生いたち』(オリエンス宗教研究所)など多数。

に由来する。訳せば「わたしのあやまち、わたしのあやまち、わたしのおおきなあやまちでした」。今の典礼では「わたしは思い、ことば、行い、怠りによって、たびたび罪を犯しました...」という形になり、「クルバ(Cu1pa)」という言葉もなくなった。今では、中世の厳しい修道生活を懐かしむ、思い出のラテン語と化してしまった。「クルクルバー」などと、ふざけてはならない。どこか似たところがあるようだが。

2. 修行・荒行・大荒行

なにしろ、バチカン公会議以前のカトリックの修道生活は、今では想像のできないほどの修行の積み重ねであった。それこそ、よく知られた比叡山の大修行千日回峯行にも勝るとも劣らぬほどのものがあつた。著者の所属するカルメル会という観想修道会では、毎日の夜半の祈り、生涯肉食を断つ永久小斎、それに、毎年9月14日、「十字架称賛」の日から、翌年の復活節までの約半年は「大斎」といわれる厳しい断食期間。また水なども、食事外では、院長の許可なくしては、一滴も飲むことができない規則があつた。

そのほかにも、体の鞭打ち、傷ついて血がでる針金の腹巻きなど。さらに、食事中の苦行などについては、本誌の中ですでにのべた[『VITALITE』誌34号、35号の「出会い」(12)、(13)]。

また、朝寝坊して早朝礼拝に遅れたり、皿を落して割ったりすると、夕食の終わりのところで、食堂の真ん中でて、院長のほうにむかって跪き、割った皿の欠片を首に下げ、全員の見つめる中で胸をうちながら、「メア・クルバ」と言いつつ、あやまちのゆるしを乞わなければならない。

次に院長がそのための償いを命ずると、深々と体を曲げて(汚い)床に接吻してから自分の席にかえる。ある時、眼鏡をこわした新米修道者が「クルバ」をした時には、「自分の眼鏡とは、なににごとだ?



フランス・タラスコン市カルメル会修道院食堂

私たちの眼鏡といえ。すべては、私たちの共有財産だ」と説法されたのは印象的だった。ふと、その時うなずいた。「私たちは皆、神の共有財産、と言うことなのかな。たぶん、あやまちや罪までも、ひっくるめて」。お気の毒な神さま、有り難い神さま！

とにもかかわらず、大小様々なあやまちについての絶え間ない糾明と反省が、その頃の修道生活を特色づけていた。文字通り「メア・クルバ」の霊性であった。もちろんそれ自体悪くはない。キリストの十字架に結びつく霊性だからである。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(ルカ9,23)というイエス・キリストの教えを忠実に生きようとしたのが、以前の霊性であった。文字通りの自己放棄である。

しかしキリストの言葉は、そこで終わるのではない。「自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失うなら、なんの得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」(マタイ16,25-26)。

表現の発想は異なっても、禅の傑僧道元の名言も、それに近い。「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするなり」(『正法眼蔵』現成公案)。自分に死ぬことによってのみ、真の自己になる。「メア・クルバ」の霊性を、極めてのみ、キリストの復活秘義に出会う。ここでもまた禅の言葉が思い出される。「生きながら死人となりて、なり果てて、思いのままにする業ぞよき」(無難禅師)。

3. 草にすわる...

わたしのまちがいだった

わたしの まちがいだった

こうして 草にすわれば それがわかる 八木重吉

禅者には「罪犯弥天」、念仏者には「罪業深重」の魂の疼きがある。

次に、中国の聖者のことばも、揆を一つにする。

夜 深く人静かなるとき、独坐して心を観ずれば

始めて妄きわまり、真独り露わるるを覺ゆ

さいにんたん
『菜根譚』

ときとところ、宗教も文化も、はるかに異にしながら、そこに息

づく人間の魂の、底しれぬ痛みは変わらない。

にしても、「メア・クルバ(わたしのあやまち)」の、ことばさえ色あせてしまった現代人の救いは、どこにあるのだろうか。

西暦二千年にあたり、ローマ教皇がカトリック教会を代表して、これまでに犯した多くの罪のゆるしを乞うた「公式のクルバ」が、新しい世紀の希望を与えるものとなれば、さいわいである。

P.G.I.のお知らせ

フォト・ギャラリー・インターナショナルは

9月25日より芝浦に統合して、リニューアルオープンいたしました。

Photo Gallery International - New Opening

・ ギャラリー・アーティスト展

2000年9月25日(月) - 10月31日(火)

石元泰博、伊藤義彦、今道子、三好耕三、原直久、川田喜久治、奈良原一高等、日本人作家20余名の作品を展示します。

・ 伊藤義彦作品展 「パトロネ」

Yoshihiko Ito "Patrone"

2000年11月6日(月) - 12月16日(土)

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分 [入場無料]

営業日:月 - 金 11:00 - 18:00 土 11:00 - 17:00

休館日:日曜日・祝日

* P.G.I.についての詳しい情報はホームページ(<http://www.pgi.ac>)をご覧ください。

表紙の写真



ー 表紙へのメッセージー

一粒の麦は、
地に落ちて
死ななければ、
一粒のままである。
だが、死ねば、
多くの実を結ぶ。

(新約聖書より引用)

クリス・スティール・バーキンス
エチオピア、1988年

わが心の遍歴

(5) 人間のいのち

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子) / はなおか・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年師家(しけ)の印可証を授与され、女性の老師となる。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化研究科教授として哲学、宗教哲学を教える。著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『禅と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

ボストンでの学会の後、ニューヨークで初めて東機質の佐多保彦社長にお目にかかり、そこから4、5時間も自動車で乗せて頂いて、山奥の禅の修行場に行った。大きな湖の傍の大きな禅道場であった。沢山の修行者が修行中であった。嶋野栄道老師様から沢山のお話を伺った。翌日には、ニューヨークの街中の大菩薩禅堂金剛寺で、奥様をもご紹介頂いた。どれだけ大変なご指導を、ご夫妻でなさっていらっしゃるのかを、心からの驚嘆の念をもって実地に見聞、経験させて頂いた。

(注:嶋野老師様には、その2年後、筆者がスイスのエラノス会議の講演に招かれて行った時に、その会場の大食堂で偶然お目にかかった。余りの偶然の不思議さに、目に見えぬ世界の連なりを思い、深く感動した。)

その日の午後は、ニューヨーク大学の医学部を見学させて頂き、エイズの研究室でその解説等も聞かせて頂いた。その夜は、ニューヨークの街全体が見晴らせるニューヨークの物凄い高層ビルの最上階のレストランで、最高の夕食をご一緒させて頂いた。

翌日は、ロサンゼルス市の禅センターに、何時間も砂漠の中を自動車で行って行った。砂漠が途中で山となり、幾つもの山を越えて、やがて高い山の上の禅道場に到着して、初めてお目にかかる前角博雄老師様にお迎え頂き、接心中の会合に迎え入れて頂いた。そこで1時間程、30人前後の修行中の皆様にお話をし、更に、秋月先生のお話の、思いがけない(筆者はどなたか英語の達人の方が通訳してくださると思い込んでいた)英語の通訳を冷や汗一杯で成し遂げた。夜は、ロサンゼルス市の街にある前角老師様のお寺で集会に参加した。

翌日は、東機質の待望の人工呼吸器を製造する会社(ニューボート・メディカル・インストルメンツ社)を見学させて頂き、夜は佐多社長のご家族の皆様との楽しい夕食の後、素敵な会話のひとときがあった。その時、深い禅のお話を、全員の皆様になされた秋月龍珉(りょうみん)先生は、もうこの世にはいらっしゃらない。また前角老師様も、御奥様と幼い3人のお子様を残しそのまま、ご他界された。1995年の群馬大学北軽井沢研修所での求真会の講演会にお招き頂いた時、前角老師様の御令弟(群馬大学教授)に、偶然お会いし、いろいろお話を伺った。出会いの余りの不思議さに、

見えない力を感じ、他者や世界の為に力強く生きていかなければならないことを、心底から感じない訳にはいかなかった。

1.人間のいのち

宗教哲学の道を歩み始めたのは、前にも述べたように、第二次世界大戦の日本の敗戦前後に、人間性の歪みや人間を自らの生きるための道具や手段とするような、正にあのドイツの哲学者であるカントが戒めた人間の墮落した生き方を目の当たりにした結果であった。真の人間性を、更には本当の宗教のあり方を求めてのことであった。

これは、日本の敗戦前後の墮落し切った時代状況が、筆者に与えた当然の働きかけであった。戦争で、沢山の親しい人々の命が失われた事実、緑の野や畑が焼けただれた姿、広島原爆による焼け野原の無惨さ等々は、幼い頃の筆者の心をズタズタに引き裂いた。その心の傷は、筆者に、人間の「いのち」や万物のいのち、人間の生きる道を考えさせることになった。

そんな生い立ちを過去にする筆者には、東機質が人工呼吸器を製造している事実と、やがては、そのメーカーを世界一の人工呼吸器メーカーにしようという佐多社長の夢(上記の写真に映る「額」の字は、三島の竜潭寺(りょうたくじ)に居られた山本玄峰老師の絶筆の「夢」であり、また、社長ご夫妻の三人のお嬢様方とそのお友達のフランス人少女のシャツに書かれている字も「夢」とは、この上なく素晴らしいものに思われた。ニューボート・メディカル・インストルメンツ社の中には、その人工呼吸器によって救われた人々やその肉親の方々や公の機関からの沢山の感謝状やその新聞記事が掲示されていた。その記事は、筆者が少女時代に広島で幾度となく見た、原爆資料館の(人間として余りにも惨めな気持ちへと駆り立てられざるを得ない、人間同士の殺し合い、国家相互の滅ぼし合いの)記事に比して、素晴らしい、明るいものであった。



1992年8月、向かって右から、佐多社長ご夫妻、3人目、4人目、7人目が、ご令嬢方。中央が秋月龍沢老大師。向かって左端が筆者。

東機貿に働かれる皆様の夢とその理想のあり方に、今でもなお、心からの敬意を抱かざるを得ないと同時に、その夢の実現と、その理想の追求の成功を、心から願わないではいられない。この願いは、筆者のみでなく、心ある世界の人々の心からの願いでもある筈である。しかし、この旅で一緒であった秋月老大師様にも、旅先でお目にかかった前角老大師様にも、またその当時は、まだ元気であった筆者の両親にも、天寿を全うされて大いなるいのちへと帰還されたわけであるから、もはやこの世では、親しく個人的に出会うことはできない。

人間のいのちは、一体どのように理解され、生きられるべきなのであろうか。いのちが問題となる時には、哲学者の西田幾多郎が分類しているように、まず、物質的生命、生物的生命、精神的生命という3段階に区別される。

しかし、もう少しこれを細かく考えると、生物的生命と精神的生命との間に動物的生命が、また精神的生命の後に宗教的いのちが置かれる方が、人間のいのちが理解され易くなると思われる。そうすると、生命は、単純な方から、物質的生命、生物的生命、動物的生命、精神的生命、宗教的いのち、と5段階に理解されることになる。

このような生命の理解において、脳死による臓器移植がなされる場合には、物質的生命、生物的生命、動物的生命における臓器移植は、比較的容易に理解されることができる。

一方、精神的生命と宗教的いのちにおいての臓器移植の意義は、あまり明白には理解されることができない。というのも、筆者にはすべてのものごとは、それぞれそれ自らの立場にふさわしい、それ自ずからに開ける各々の立場と、それと同時に風土的な地域差から出てくる西洋思想と東洋思想の根源から、更にエロス(人間的な、一切を奪う向上的愛)を核心とする哲学とアガペ(神的な、一切を与えようとする自己空想的愛)を中心とする宗教の根源から、また、世界思想の二大思潮となっている仏教とキリスト教の根源からも、考察されなければならないと考えられるからである。

以上のように、西洋思想と東洋思想の、また哲学と宗教の、そして仏教とキリスト教の、根源から、精神的生命と宗教的いのちが理解されようとする時には、思考や思索の基礎となる有と無を



1992年8月、ニューヨーク郊外の禅道場にて。向かって右から、佐多社長、秋月老大師、嶋野栄道老大師、筆者の順。

中心とした枠組みとしての「パラダイム」が使われると、事柄の理解が、容易となると考えられる。

何故ならば、私たち人間のいのちにとって最も重要な実施である脳死による臓器移植は、日本にとって、今世紀最後の、最も重要なテーマのうちの一つであり、かつ日本の宗教・思想と医学・技術との葛藤と調和の上で成り立った筈の実施であるが、これには、そう簡単には賛同できない根拠があると考えられるからである。

というのも、脳死による心臓やその他の人間のいのちを保つのに重要な臓器の移植は、どのような場で考えられるかによって、その是非が変化すると考えられるからである。先に見た、物質的生命、生物的生命、そして動物的生命の段階においてのみ脳死による臓器移植が考えられる場合には、さして問題は無さそうに見える。しかし、それは、精神的生命と宗教的いのちにおいては、それ程容易な問題ではなくなるのである。

2.新しいパラダイムとしての「絶対無」の追加

西洋の伝統的な主流の形而上学においては、一切は、存在(being、有)や未存在(not-being、未-有)や非存在(non-being、非-有)と、また不安や絶望やキリスト教的な罪意識は、相対的無(relative nothingness)と表現される(例としてはケルケゴールの実存思想が挙げられる)ことが普通である。キリスト教の神すら絶対的存在(有)と理解される時代もあった。

更には、キリスト教の神の死の経験は、例えば、ニーチェにおけるように、虚無(nihil)と表現される。しかし日本の鎌倉時代以来、今日に至る迄の仏教系の思想や哲学においては、無情(heartlessness)とか無(nothingness)や、絶対無(absolute nothingness、西田哲学の用語)という表現が使われてきている。

(注:しかし、旧約聖書時代の神や、現代の最先端を行くA.N.ホワイットヘッド[1861-1967]における神は、「出来事」(event)や、出来事における「働きそのもの」と理解されており、このような神理解は、有(存在)と無(非存在ないし未存在)の根源である絶対無の働き 自己限定 そのものの表現として、現代に相応しいと考えられる。)

20世紀を振り返る

新米ソムリエの失敗談と苦い体験

横山 弘和

新米ソムリエの失敗談

さて、勉強しながら実務についた私には、色々な失敗が待っていました。その一つは、仕事を始めたばかりの3日目、日本IBM社の役員が午後、レストランに来られ、その夜大事なお客様を招待する席の予約と料理を決めに来られました。ついでにワインも注文しておこうと、ワイン・リストを所望されたので、早速、新米ソムリエの私が、恭しくリストを渡しました。しばらく目を通してから私に、あるドイツの白ワインを指さし、「このドイツ・ワインは甘くないか?」と質問しました。そこで、まだどのワインがスイートでどれがドライかも、よく把握していない私は「いいえ、このワインは甘くありません。ドイツ・ワインに甘いものなどありません」とはっきり言い切りました。その紳士は妙な顔をして「君は自分が何を言っているのかわっているのか」ときつい口調で言い「もう君とは話をしない」と背を向け、リストを眺め、フランスのアルザス産のリースリングという白ワインを指さし「これをよく冷やして置くように」と命じ、すごく機嫌悪そうに立ち去って行きました。

冷やしたワインが、冷えていない!?

何故怒らせたのか解らない私は、直ちにそのワインをクーラーの中に氷を一杯に入れて、来店を待ちました。午後7時頃、お客様を4人連れたその紳士が来店し席につきました。私は何とか機嫌を直して欲しいという願いをこめて、先ずワインの瓶を提示し、「これがご注文のワインです」とお見せしました。すぐにサービスをしてくれ、との事で、栓を抜き味見のためのワインをグラスに少なめに注ぎ、OKを待ちました。ひとくち口に含み味見をした紳士はまた妙な顔をし「このワインは、全然冷えてないじゃないか」と言いました。そこで私は「ミスター・ベヤード、私は何時間もこのワインをクーラーで冷やして置きました」と言いました。彼は「それじゃあ、自分で飲んでみる」と言うので、少しグラスに注ぎ、味わってみました。すると紳士の言う通り、ワインは全然冷えていませんでした。そこで、私はやっと気付いたのです。

ミスター・ベヤードにワインのABCを教わる

ご存じの方も多いと思いますが、アルザス・ワインの瓶は、細く



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1938年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。
95年に退社するまでソムリエとして38年間一貫してワイン
関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・
デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在在米多商會ヴィ
タリテ事業部に在籍。

で長く、クーラーに入れても、瓶の首の部分は、氷の上に出てしまいます。いくら長時間、氷を補充しても、味見のために注がれる部分は、むしろ温まっているのです。その時点で、さすがのミスター・ベヤードもあきれてしまい「それでも、君はソムリエか、今度くる時は、ワインの本を持ってきて、頭に叩き付けてやる」と言いました。取りあえずその夜は、失敗を取り返すために、一生懸命サーヴィスし、お帰りにする時はいくらか機嫌も直り「これから君にワインのABCを教えてやる」と言って帰られました。その後、私も努力し、ミスター・ベヤードも、私を気に入ってくださり、お客様を連れてくる度に「彼にワインを教えたのは、この私だ」と、自慢気に紹介して下さる程、親しくなりました。なお、ドイツ・ワインに甘いものが多いのを知るのが、あまり時間はかかりませんでした。

苦い体験

そのような失敗を重ねながら、少しずつ、格好が付くようになりましたが、ワインの売れ行きのほうは、良くありませんでした。邦人のお客様には、まだワインは馴染みの無い飲物でした。そして、お客様の約70%を占める外人客も、東京の物価が世界のどの大都市に比べてもかなり高い、のはよく承知していましたが、ワインの値段が並み外れて高いのには、反感をもたれる程でした。その頃の体験を、一つ紹介しましょう。

ワイン・リストの勧めかた

普通レストランでは、お客はテーブルにつくと、先ず、食前酒を注文します。それをゆっくり飲みながら、会話をします。頃合いを見計らって、ウエーターがメニューを渡し、食事の注文を取ります。その後、ホスト側からワイン・リストを所望する場合は、最初からワインを飲むつもりで来店した、のですから、ソムリエは、ワイン選びの手伝いをするだけで済む訳で、楽です。強い言えば、より高額なワインをうまく勧めれば良いのです。ここが、ソムリエの力量で、差が付く点です。ワインのことを考えずに来店したお客様には、こちらからアプローチしなくてはなりません。そこで、ソムリエは、そのテーブルでの料理の内容を把握して、それに合わ

